

序章 オフィス・спанキング

男は二十歳までに結婚できなければ、とても恥ずかしい思いをすることになる。

男だったら誰だってこの言葉を聞いて育つ。
俺だって聞いて育った。

と言うか、俺に言わせれば世の中の男子は二十歳になるまでの間の時点で、相当に恥ずかしい思いをすることになっている。

もしも女子に「お尻っ！」と言われたら、ズボンもパンツも脱ぎ、指定された体勢でお尻を差し出さなければならぬ。

彼女たちの気が済むまで、叩かれなければならない。

お尻叩きの権利は女子なら等しく平等に、誰もが所有している。

男子に拒否権はない。

ただひとつの例外を除いては…。

例外とは、『誰かの男』であること。

男女交際をしている女子がいる場合に限り、男子のお尻は彼女の専有だ。

他の人間にどうこうして良いものではない。

だから男子は必死で女子にアプローチをする。

付き合っただけと願う。

しかし…。

そう簡単に女子とは付き合えない。

女子だって男は選びたいからだ。

しかも女子というだけで、男子は次々と交際を申し込んでくる。

彼女たちに見れば選り取り見取りだ。

当然これは成人してからも変わることがない。

だからこそ、独身男子は恥ずかしいものなのだ。

交際相手がいらない男子は、どこで誰に『お尻っ！』と言われても、文句は言えないし、素直にお尻を叩かれなければならない。

ただし、成人した男子で結婚した場合はまた別だ。

結婚済みの男子は、交際相手のいる男子と同じ扱いになる。

ただ、紛らわしいからそういう男子は家で家事を行うことが普通。

外で働いている男子は交際相手がいらないか、あるいは妻や彼女に『こいつのお尻は誰でも好きに叩いてあげて♥』というふうに使われている、というのが暗黙の了解。

だから、働いている男子はお尻をいつも誰かに狙われている。

学生時代、ありとあらゆるアプローチを行い、その一切が徒労に終わった俺は、会社勤務2年目を迎えた日に彼女と出会えた。

その話から始めたいと思う。

「は〜い♥

営業第二課の男子は全員成績表を貼った壁際に立って、お尻出しなさ〜い。

足首掴んで、お尻が女子に見えるようにね〜」

課長の声で、俺たち男子は成績表が貼りだされている壁際に、全員が一列に並ばされる。

成績に応じて、スパンキングを受けるためだ。

成績優秀なら、軽めのスパンキング。

成績が悪いのなら、厳しいスパンキング。

もちろんここで発表される順位によって給与だって変わってくる。

つまり、俺たち男子にとっては、生きるか死ぬかの判決をくだされる日でもあるのだ。

そういう大切な日に、会社はあえて今年入ったばかりの新入社員（女子のみ）を立ち会わせるのだ。

もちろんこれは新入社員に対し、会社においても学生時代同様女子が『お尻っ！』と言ったら、男子はお尻を差し出さなければならないということの印象付けのためだ。

『男子に対するコミュニケーションは、言葉だけでなくお尻にも伝えること』

これが我が社の社訓でもある。

男子がお尻を叩かれ始める前に、会社の紹介をさせて欲しい。

我が社の社名は、『株式会社 オフィス・スパンキング』。

創業は明治3年と、意外と古い。

そもそも世の男子は大抵が、二十歳前に結婚し家庭に入るので、一般企業では男手が全く足りない。

我が社はそういう会社に、結婚できなかった男子を派遣・レンタルして収益を上げている会社だ。

つまり我が社では、男子社員のお尻こそが商品。

いや、少し違うな。

『男子社員をレンタルして、好きなだけお尻を叩ける』というサービスが商品なのだ。

当然リピーターになってくれるお客様企業が多ければ男子社員は忙しいし、お尻はいつ

も真っ赤だ。

そして、逆もまた然り。

あまりにもリピーターのいないダメ社員は、いずれ社内の『特別教育部』から徹底的にお尻を叩かれる。

成績が悪いところなるという見せしめのためだ。

ちなみに俺は……………。

いや、言わないでおこう。

多分最後に呼ばれるのが俺。

つまり成績最下位は……………、俺だろうから。

「は〜い。」

じゃあ、去年度はお疲れ様あ〜。

早速だけど、横浜支店営業第二課つ、男子成績順位を発表します。

一番はいつもの通り、稲葉ク〜ン。

一番だから、手で一発だけ。

ねぎらいの一発♥♥

パンっ！

「ひぐっ！

あ、ありがとうございます」

「うんうん♥

今年もその調子でバンバン稼いでね！」

「は…はい。ありがとうございます」

同僚の中でも最も背の低い、小柄なお尻の稲葉の右のお尻には、文字通りねぎらいの一発だけ。

彼の赤い腫れはすぐに消えるだろう。

あいつのお尻は、赤くなってもすぐに元の色に戻る、特殊なお尻叩かれ体質だからだ。すぐに元通りになるから、いくら叩いてもどす黒く腫れたりしない。

しかも小柄タイプのお尻だから、女性の受けが良い。

女性から見ても、小さいものは可愛く映るのだろう。

そういう彼だからこそ、『一番』。

「次は〜。

峰クンっ！

稲葉クンには勝てなかったけど、本年度は頑張っつてね。

あ、峰クンは結婚するんだっけ？

まあ二番目だから、お尻叩きもちよっとレベルアップ♥♥

課長の手には30センチプラスチック定規。
それも幅の大きい奴だ。

頭の上まで振り上げたそれは、弧を描いて峰のお尻に叩きつけられる。

ピシヤンっ！

「ひっ！

あ、ありがとうございますすうう！」

峰は叩かれた瞬間、身体が軽く震えた。

しなるプラスチック製の定規がお尻に巻き付いて、後から痛みと熱さが沸き上がってき
ているのだろう。

そういう方が、『効く』と言う男子は少なくない。

「結婚式には呼んでね♥

いつ頃の予定だっけ？」

「は…はひい……

6月ですう…」

「あら、ジューンブライド？

素敵じゃない♥

じゃあ、成績三番目は…伊藤くん！

もう…っ！

ダメじゃない！

伊藤くんは、もつといい子にしないとっ！

いくらお尻が可愛くても、このままだと貴方…生活できないわよ！」

「う…すみません」

『「めんなさい」は、お尻叩きの後で聞きます。

お尻叩きの前に言うのは『反省するために、お尻叩きをお願いします』でしょっ！？

お尻叩き追加っ！」

次に課長の手に握られたのは、ヘアブラシ。

それも硬い櫛の木で出来たやつだ。

ヘアブラシは男女で使い方が違う。

女子は髪を梳いて、美しくあるために使う。

男子はお尻を叩かれて、反省を促すために使われるのだ。

だから俺は女子がヘアブラシで髪を梳いているのを見ると、自分のお尻が叩かれるので
はないかと不安になってしまう。

見るだけで股のあたりがきゅんと、心細くなるのだ。

課長はそれを高く振り上げて、伊藤のお尻を強く叩く。

バシンっ！

「あぐうっ！」

それはもはや叩くというよりも叩き付ける、といったほうが正しいかもしれない。

伊藤は足をばたつかせて悶えていた。

伊藤が特別に弱いわけじゃない。

課長のスパンキングの心得が優れているのだ。

ねぎらいや愛情表現の一発は限りなく優しく、愛情に富んでいる。

一方で『教育』『躰』『お仕置き』そういうためのスパンキングは的確に、最も痛みが残るように叩く。

要するにお尻叩きが巧いのだ。

「御礼はどうしたのっ！

御礼はっ！」

バシンっ！

「ひいっ！

すみませんっ！

ありがとうございますありがとうございますっ！」

「心が籠ってないっ！

やり直しっ！」

バシンっ！ バシンっ！ バシンっ！

「ひいひいっ！！！！

ありがとうございますっ！

お尻叩き、ありがとうございますっ！」

「ふん？」

「どうして伊藤くんはお尻叩かれているのかしらね？」

来た！

課長のお尻叩きをしながらのお説教タイムだ。

これがありとあらゆるお尻叩きの中で一番ツライと伊藤はよく言っている。

…可哀想に。

多分、課長もそのことを知っている。

だからわざと…、ということなのだろう。

「せ、成績が悪くて…、その…」

「そうよね〜」

バシンっ！

「はぐっ！」

「成績が悪いと、こんな風にお尻をイタイイタイされちゃうのよねえ〜」

バシンっ！

「ひっ！」

「そろそろ聞かせてちょうだい。

今後はどうするつもりなのかしら？」

バシンっ！

「あぐっ！ こ、今後は…成績がいつも上の二人に負けないように…」

バシンっ！

「ひぐっ！ がんばって、お尻を叩きなくなる男子でいたいと…思います…」

「はい♥」

分かったわ。

じゃあそのお約束を守れなかったら、またお尻叩きよ。

いいわね？」

「…はい。お尻叩きの罰…、ありがとうございました」

お尻叩きの後に、お尻をグチャグチャに揉みほぐす。

それが課長の『お仕置きスパンキング』のルーチンワークだ。

伊藤は俺の横で「はぐっ！ はぐっ！」と声を漏らしながら、ただただ課長にお尻をもみくちゃにされていた。

「伊藤くんから成績が下なのは…あと、仲秋くんだけね？」

じゃあ、罰として二人は新入社員研修に行ってもらおうわよ。

さてと…、中秋くんっ！

あれだけ注意しろって言ったのに何？

結局最下位じゃない！

ちよつとこっちに來なさいっ！」

それまでは、男子全員壁際でお尻を叩かれていた。だから新入社員の女子からも多少の距離があったのだが…。俺だけが耳を引っ張られ、新入社員の目の前まで引きづられてゆく。もちろん下半身は裸のままだ。

パンツもズボンも、足首まで下ろしているので歩く姿は無様で、その姿だけで新入社員の失笑を買う。

しかも、課長の顔は怒りに満ちている。

激怒しているというよりも、呆れているのと怒りが半分半分に混ざっている、という表情だ。

一瞬上げようとした俺の後頭部を課長が強く抑えこんで俺に足首をつかむように促す。そして股の下に手を突っ込んで俺のペニスを後ろに引き抜く。引き抜いたまま、上に引き上げるのだ。そうすることで俺は嫌でもお尻を高く突き上げざるを得ない。

「あぐうっ！」

「もっとお尻を上げなさいっ！」

もっと高くっ！」

そうっ！」

その高さをキープするっ！」

おち○ちはしまいなさい。

お尻叩きの邪魔になるからっ！」

課長が急に『叱るモード』に入ったせいとか、新入社員たちは引いているように見えた。それはそうだろう。

先程までのほのぼのとしたお尻叩きとは違う。

大人の男を叱るためのお尻叩きだ。

俺は自分のペニスをすごすごと前側に戻して足首をつかむと同時に、課長の声がオフィスに響いた。

「言うことあるでしょ？」

身体が自然と震えてしまった。

しかしそれでも口を開いて言わなければならない。

『お尻叩きお願いします』
の言葉を。

「せ、成績最低の、お……お尻に……その……ば、罰を……あの……。

き、厳しい…お仕置きを…は、反省…反省しますから…その…」

「新入社員の女子の皆さんは、こういうオネダリもまともに出来ない男子社員はしっかりとお尻を叩いて、躰なおしてあげてくださいね。」

今の挨拶は追加罰が必要です。

何回、必要だと思いますか？

はい。

じゃあ、そのロングヘアーの女の子」

「はい。」

挨拶は人としての基本ですので、お尻叩き30回追加か、一番恥ずかしい場所でのコーナリングが良いかと思えます」

「うんうん♥

模範解答ね。

でも、この男子社員は一年で一番成績が悪いの。

その程度のやんわりとしたお仕置きでは躰なおせないわ。

良い？

こういう頑固なお尻には、両方罰を与えましょう」

キャ〜という歓声の中、課長が手にとったお尻叩きの道具はハート型のスパンキングパドル。

ドゥ。

ハート型の皮が、鞭の先に付いているスパンキングパドルだ。

これで叩かれるとハート型の赤い痕がお尻に残る。

可愛らしいからこそ、笑われる。

自分ではきちんと見れないから、余計に恥ずかしい。

そのためのハート型スパンキングパドル。

ヒュンヒュン、パンっ！！

「あぐっ！」

「この程度で声を上げないっ！」

ほら、次行くわよっ！」

パンっ！！ パンっ！！ パンっ！！

熱がお尻に溜まってゆく。

籠った熱が俺の身体の奥にガツンガツンと上がってゆく。

頬に汗がたつたって、床に落ちたのが分かる。

鼻まで赤くなっているのが自分でも分かる。

その上、身体が震えているのも…。

パーンっ！！ パーンっ！！ パーンっ！！

「ひぐううっ！！！！」

泣きたい。

でも泣けない。

目をつぶって、奥歯を噛む。

少しでも頭が上がりそうになると、課長が俺の腰に手を置いて動かないようにと、制するのだ。

ただ単に手を乗せられているだけなのに、この手だけで金縛りにあったように俺は動けなくなってしまうた。

動いたり暴れたりしたらさらに追加で、お尻叩きの回数が増えるから………だけではないだろう。

パーンっ！！ パーンっ！！ パーンっ！！

「あぎいいいっ！！！！」

逃げれないお尻に、腕の重み加わった勢いのあるスパンキングパドル。

パドルの先の方が痛いのは、スパンキングラケットがよくしなっているからだろう。しなるパドルは、あまりに重い。

痛いと思うのは叩かれてから少し経ってからだ。

最初に感じるのは重さ。

次に、熱。

最後に、痛み。

そして……今回はもうひとつスパイスがある。

「クスクス。あれであたしたちより年上なんでしょ？」

「ああいう男も『先輩』って呼ばなくちゃいけないのかしらね？」

「いいんじゃない？」

『先輩♥』って呼ばれながら、お尻を叩かれる方が精神的にキツイでしょ？」

「それもそうね。」

それにしても……ピンク色に出来上がってきたね。

ハート型のスパ痕♥（スパンキングの痕の略称）」

「あれって技術がいるんでしょ？」

課長ってやっぱ凄いのね」

「あっ、あたしもそれ思った！」

最後のスパイスは…年下の、会社に入りたての女子社員のコソコソ話だ。

パンっ！！ パンっ！！ パンっ！！

「はぐうっ！ あぐぐっ！ ああうう！」

「こらっ！」

もっとお尻を高く上げなさいっ！

膝を折らないっ！！！！

足首掴んで、お尻をもっと突き出すっ！

男子は入社して最初に教わるでしょっ！？

っていうか、学生時代にこのくらいはきちんと出来るようになっておいて！」

課長の激に俺は震えたまま、首を縦に振る。

「す、すみません」

「ほらっ！ ペンペンっ！ ペンペンっ！ ペンペンっ！

パンっ！！ パンっ！！ パンっ！！

課長の子供をあやすような「ペンペン」発言に新入社員たちがどっと笑う。

そして、先程まで笑いをこらえていた同期や先輩の女子たちまでもが、声を上げて笑う。

俺の、お尻を叩かれている姿を見て…。

皆が声を上げて笑う。

俺はようやくやく自分が涙を浮かべていることに気がついた。

「やだあゝ」

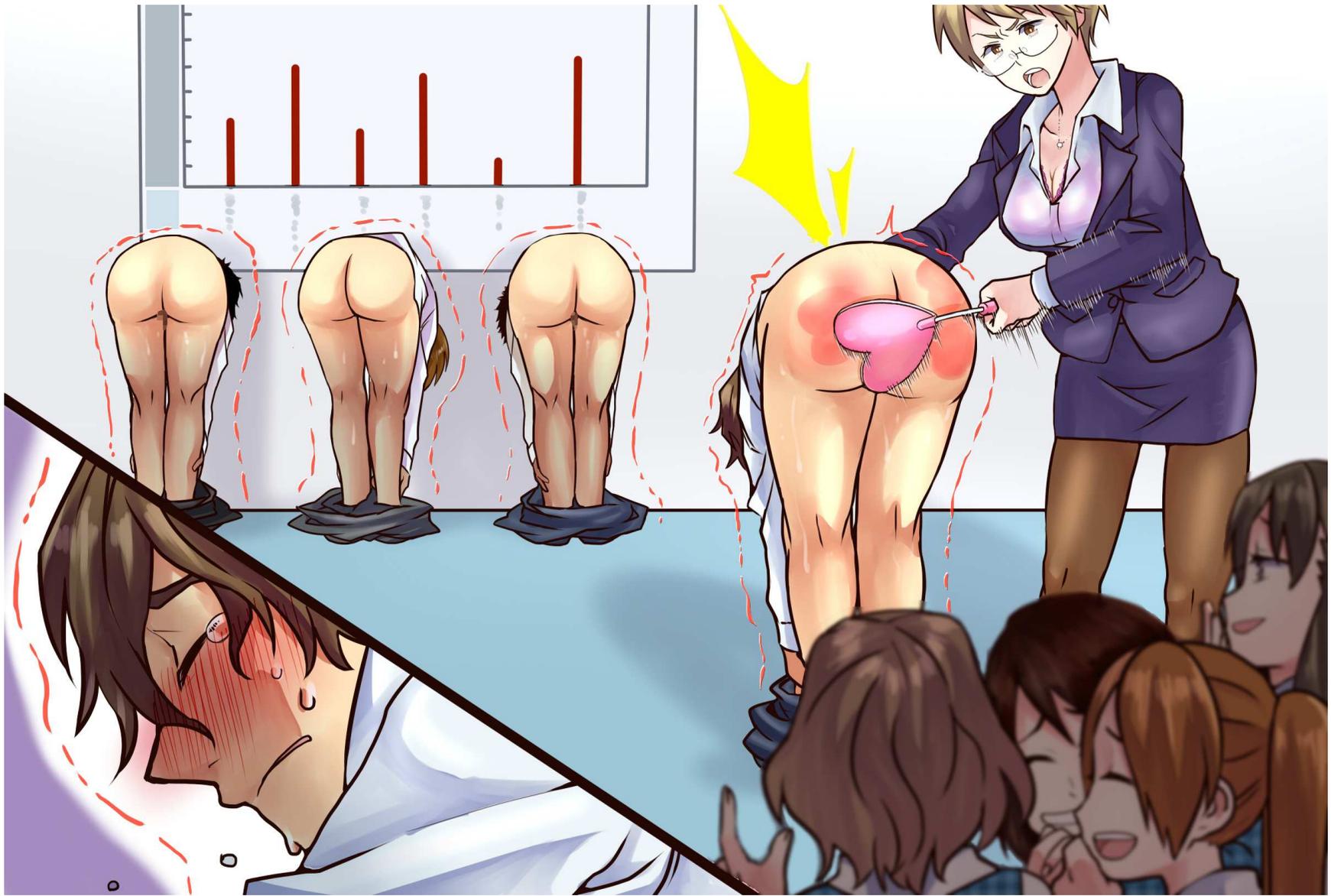
泣いちゃったゝ」

「まあ仕方ないよね？」

ペンペンされるような男子だし…」

「クスクス」

「ああ、恥ずかちゝ♡」



俺は泣いて、泣いて。
お尻叩きを受け続けた。

回数にして、100回を超えた頃だろうか。

課長はようやく手を止め、いつもの優しい声で新入社員たちにこう言った。

「さて、年間成績最下位の仲秋くんはこれで十分に反省できたと思えますか？」

女子社員は一斉に、それも声を揃えて俺への判決を下す。

「出来てませ〜ん」

「でも、これ以上仲秋くんのお尻は叩けないわ。

どす黒く痕が残ったら、もうレンタルに出せないもの。

ではどうすれば良いか、分かる人いますか？」

「はい！」

「あら？」

あなたはさつきも答えたわよね？

う〜ん。こういう場合いろんな人の意見を聞きたいのだけど…まあ、いいわ。

じゃあロングヘアアの貴女。

どうすれば良いか言ってご覧なさい」

「コーナリングなどのお尻を叩かない、恥ずかしいお仕置が良いと思います」

「そうね。」

コーナリングの他にないか良いアイデアはある？」

「はい。」

私の家では、お姉ちゃんの彼氏が粗相をした時は、お尻叩きの後は全裸で生活させています。

洋服は一切着させずに、全裸で家の仕事とかさせてます。

それではいかがでしょうか？」

課長は少しの間、靴を床にコツコツと当てていた。

悩んでいたようだった。

そして、ゆっくりと口を開く。

「…いいわね。」

貴女名前は？

とても良いわよ。そのアイデア。

ぜひ採用しましょう！」

「ありがとうございます。」

名前は向日葵です。

花のヒマワリと同じ字を書きます」

ロングヘアアの彼女はそう答えた。

課長は彼女をいたく気に入ったようだ

「そう。覚えておくわ」

と嬉しそうに答えて、もう一発俺のお尻にスパンキングパドルを叩きつけた。

「あぐうっ!!!」

「じゃあ、新入社員のみなさんは、お昼に行ってきて。

それから、立花さん。

あなたは仲秋クンを女子トイレの入り口前に連れて行ってもらえるかしら？

もちろんこのお尻叩きポーズで全裸のままよ？

午後は新入社員のレクレーションがあるからそれまで、しっかり仲秋クンを反省させてあげて。

仲秋クンは女子トイレの前でしっかり反省すること。

いいわね？

他の男子はもうズボンを上げて良いわよ。

お客様企業に行く男子は準備をなさい。

ほらほらほらっ！

さっさと準備するっ！

課長はそう言うて手をパンパン叩いて、社員を促した。

俺はというと、立花さんなる同期の女子に耳をつねられながら、女子トイレの前まで連れて行かれ、その場で全裸にさせられた。

「良い？」

あたしが良いと言うまで、そのお尻叩きポーズで立っていないさい。

お尻隠したり、逃げたりしたらスーツ返さないわよ。

それから…。

男のくせにあの程度のことです泣かないっ！

同期としてすごい恥ずかしかったわよ。

新入社員にナメられるようなことをしないっ！

俺は立花さんの、至極真つ当な正論に涙を浮かべたまま、消えそうな声で

「すみません」

と返答した。

もちろん「声が小さいっ！」と、お尻を手の平で叩かれることになったが…。

去り際に、立花さんは

「課長、あれでも優しくしてくれたのよ？」

30回以上叩かれる時は、叩かれた回数を言わないといけないのに、貴方。言わなかったでしょう？

ホントなら、それも追加罰なのよ？

課長に感謝しなさい。

あんなに優しい上司はいないわよ？」

俺は、この会社に入った時、最初に教わったことの中に「30回以上叩かれる場合、男子は叩かれるたびに回数と御礼を女子に伝える」とあったのを思い出して、また涙が出てきてしまった。

「アンタ、お給料も最低まで下がるだろうし、可哀想だと思っけどさ。

いい加減、『お尻叩きを頂く』って態度を示せないよ、誰もお嬢さんに迎えてくれないわよ？」

左の薬指に銀色の光をたたえながら、立花さんは俺のお尻をもう一発。

「ひぐううっ！

ありがとうございますっ！」

「ぞ。

そうやって御礼を言うのは男子の義務でしょ？

今日、仕事が終わったら課長に『回数を言わなかったこと』をお詫びなさい。

あの人、甘いから多分、許してくれるわよ。

許してもらえないまでは、『許されない』身分だっけことを、よくよく噛み締めて今日一日過ごしなさい」

俺は…。

不覚にも同期のお説教に…。

心の底から、自分が情けなく思えて…。

声を上げて泣いてしまった。

時折、トイレに来る女子にクスクスと笑われながら…。

第2章
ラブ・スパンキング1

男としてどうしても恥ずかしい行為の一つに、女子によるペニスの観察がある。

真っ赤に腫れ上がったお尻を眺められるのと同じくらい、ペニスの鑑賞は恥ずかしいと思う。

なぜなら女子の頭の中に、「ああ、こいつのおち○ちんは、他の男子に比べサイズが小さいな」とか「右に曲がり過ぎなんだけど(笑)」と考えているのが分かるからだ。

だから、できることなら見られたくないし、お尻と違って、ペニスは女子の命令があっても隠して良いとなっている。

もちろん、強情張って隠し続けると、お尻叩きが待っているが…。

このペニス鑑賞だが、ウチの会社では当たり前に行われている。

お尻はパウダーやローションで色艶をごまかせるし、写真だとしても『レンタル側』が自分の理想を写真とともに頭に浮かべてから、依頼をかけてくる。

ネット商品でも、実際に届いたらデザインが微妙に違ってがっかりしたという経験があるだろう。

あれがスパンキングをとても強く期待していた男子のお尻で起こったら、強いクレームを入れたくなるのは当然かもしれない。

しかしペニスは違う。

はつきりと数値化出来るのだ。

・長さは勃起時、18センチ。

・やや左曲がり。

・仮性包茎。

・陰毛は学生時代に永久脱毛済み。

とまあ、こんな感じだ。

実際、俺のパンフレットにも身長体重、お尻のタイプ（大福型か、こんもり山型か、垂れ気味か、引き締まっているか等）の他にペニスの数値が書き込まれている。

なぜこの話を、次に持ってきたかというところ…。

ロングヘアの彼女、向日葵さんに初めてお尻を叩かれたのがこの時だったからだ。

午後の鐘がなる。

正確には、鐘の音をアナウンスで流しているだけだ。

うちは今時珍しいくらいに古風な会社で、就業開始時刻と昼休みの始まりと終わりに、そして終業時刻に鐘の音を流す。

今は昼休みが終わったチャイムだ。

「やっ。」

えっと……。仲秋先輩：でしたよね？」

自分が間違えていないか心配そうに、でも真っ赤に腫れ上がった俺のお尻を見てクルクルと楽しそうに：向日葵さんはそう確認してきた。

「うん。」

このお尻は間違いないかなっ」

この一言で、彼女がとてもさっぱりとした、竹を割ったような性格だと分かる。

「じゃあ、失礼しますね」

「え？ いぎっ！」

まさか後輩に……。

耳を捕まれ、引き回されるとは思わなかった。

「痛い痛い痛いっ！！！！！」

俺の声は誰にも届かないと言わんばかりに、向日葵さんは俺の声を無視したまま、俺の耳を引いて歩いてゆく。

耳の高さを低い位置に固定された状態で歩くと、必然的に女性のお尻と俺の頭の高さが同じになる。

向日葵さんのお尻は、スカートの上からでも分かるくらいに引き締まっていて、張りのあるお尻だった。

向かった先は会議室。

今日が新入社員のためのレクレーションの日だからだ。

このレクレーションは、新入社員のためだけでない。

参加させられる男子は、新入社員だけではないからだ。

つまり俺のような：結果が残せないような男子社員は罰として新入社員のレクレーションに強制参加することになる。

ウチの課からは、俺と伊藤が参加。

朝、課長が伝えた通りだ。

去年は新入社員として参加したからよく分かる。

男子は、ペニス鑑賞会とお尻叩き基本講座。

これを『される側』として参加しなければならない。

女子は逆だ。

『する側』として参加する。

女子の参加は強制ではない、不参加もOKだ。

部署によっては即戦力として人数を必要としている部署もあるからな。

参加しても、しなくても良い。

……。

まあ、そうは言っても女子もほとんど全員が参加することになるのだが…。

「付きましたよ。仲秋先輩♥」

向日葵さんはドアの前に立つと振りかえって、俺に嬉しそうな微笑みを浮かべてくれた。

「あ…あのっ！」

「ん？ 何ですか？ 先輩」

「あの…耳を離して下さい。」

「……………お願いします」

俺の消え入りそうな声を向日葵さんは、黙って聞いて、少し考えてから聞き返してきた。

「そうですねえ。」

逃げたりゴネたりしないいい子に出来るなら、いいですよ？」

彼女の一言は、俺に会社からの信頼がないということを理解しての言葉だった。

彼女なりに、よく知らない俺をにどう対応するべきか理解できているからこそ「逃げてりしないなら…」の言葉だ。

頭が良い。

しかも、はっきりとそれが言える、竹を割ったような性格。

俺はそんなことを考えながら、彼女に

「逃げたり…しません」

と答えた。

多分それでも離してもらえないだろうなあ、と思いながら。

「じゃあいいよ」

「へっ？」

向日葵さんは耳を離すと、その手でドアを開けてくれた。

俺は今でもあの時のことが忘れられない。

多分、彼女を愛したのはこれがきっかけだと思うから。

どうやらレクリエーションの司会進行はウチの、営業第二課の課長の仕事らしい。

「はい。」

じゃあ、男子は全裸になって。

参加者の女子の皆さんは全裸になった男子の中から、パートナーを決めて下さい。

女子に選んでもらえなかった男子は壁際に立ってね」

先程まで俺を怒っていたとは思えないような優しい口調で、課長はそう告げた。

「じゃあ、あたしは仲秋先輩にしよっかな！」

「え…あ、…あの…」

「ほくらっ。」

さっさと来る！」

ケタケタと笑う向日葵さんに腕を引かれ、俺は彼女の座る椅子の右側、横に正座した。ここが男子の定位置だからだ。

お尻叩きを受ける際、女子が椅子に座っているのであれば、女子の利き腕の方の床に座る。

これは男子のマナーみたいなものだ。

こうすることでよりスムーズに、OTKのポーズに移行できるからだ。

「はいはい。」

パートナーの決まっていない女子はいませんか？

余った男子は、恥ずかしがらずに、おち○ちんを隠さないようにして壁際に立っていない。さい。

女子の皆さんはそれぞれ、机に置いてあるレジユメ（プリント）とスパンキング用品の中から好きなものを選んで持って行って。

早速だけど今から女子の皆さんには、お尻叩きをしてもらいます。

今、皆さんのパートナーになった男子は新入社員か、出来の悪い先輩社員だから遠慮無く、手にとった道具でしっかりとお尻を叩いてあげて。

男子は叩いてもらいながら、レジユメを声に出して読み上げること。

ちゃんと最後まで読んで頂戴。

読み終わったら、女子はパートナー交代よ。

今、余っている男子と今のパートナーである男子を交換して。

そうしたら、もう一回お尻叩き。

男子全員がお尻叩きを受けるまでグルグルと回すからそのつもりでね？」

「はいっ！」

女子の返答がキレイに揃ったのを確認すると、課長は長机の上にスパンキング用品、具体的に言えば、スパンキングラケットや、ケイン、それにスパンキングパドル、他には乗馬ムチなどを置いていった。

道具の数はたっぷりある。

女子の数よりも多いくらいだ。

俺は黙って、向日葵さんの帰りを待つ。

女性の支度は時間が掛かるのが通例だ。

道具選びにも時間がかかるだろう。

そう思っていたが、向日葵さんは違った。

道具をひと通り見るだけで、何も手にせず戻ってきたのだ。

いや、正確には課長に一言断りを入れてから戻ってきた。

「いや、道具は無しの方が良いよね」

「えっ？」

お尻叩きがこれだけ社会の根幹を為すようになると、道具の重要性は常識でしかない。つまり、お尻を叩く側からすると、肉の塊であるお尻を『手で叩く』のは手を痛めるリスクであると広く認識されている。

このコトを考えると、女子は道具を使って男子のお尻を叩くことが普通となる。結果として…。

男子は手の平で叩いてもらえることなどまず無い。

朝の成績発表の時も一番を獲った稲葉だけが手の平で叩いてもらえている。

他は、全員違う。

あるいは手の平スパは、キスにも等しいご褒美なのだ。

それなのに…。

「いいんですか？」

「…うふふっ」

向日葵さんは俺の言葉を聞いて、ケタケタと笑い、言葉を続けた。

「ごめんごめん」

仲秋先輩は『先輩』なんだから、あたしに敬語を使わなくても良いんじゃないですか？

「いや…でも…あの…お尻を叩いてくれる人には…御礼と…敬意を…」

「ああ。」

まあ、そうですね。

その考えには賛同します。

とても『叩かれる側』の、男子らしい素敵なお尻感覚ですね」

「…ど、どうも」

「でもあたしは、手の平でペンペンする方が好きです。

こっちの方が、ダイレクトに伝わってくるんで」

「伝わってくるって…何が…？」

「気持ちですよ。気持ち」

向日葵さんはそう微笑むと、俺の腕を引いて俺を自分の膝の上に腹ばいに寝かせた。

俺はレジュメを落とさないように、気をつけながら彼女の上で教科書通りにお尻を上げる。

「ん？」

「いいよ、そんなに踏ん張らなくても。」

「それより膝から落ちないように気をつけてね」

向日葵さんはそう言うと、俺の脇腹をぐいっと手で寄せてから、俺のお尻を撫でた。

「朝のスパ痕がまだ残っているね。」

「でも…、手加減はしないよ」

課長の『お尻叩きはじめっ！』の声とともに、一斉に会議室中に弾けるお尻叩きの音。もちろん、向日葵さんもそれに続いた。

「.....おめめ」

.....



その手から伝わってくる衝撃は重く、
的確に、俺のお尻の肉を包み、

すべての衝撃をしっかりと中の中まで伝えようとしているのが分かった。

パーンっ！！！！

「あああっ！！！！」

思わず声が漏れてしまう。

……この人、……すごく上手だ……

そう思っていると、向日葵さんの声が俺に降り注いだ。

「どうしたんですか？」

レジュメ読まないと、お尻叩き終わりませんよ？」

「あ……あうう……は、はい……」

パーンっ！！！！

「あひっ！！！！ あひっ！ あひっ！」

「うふふ ♡」

可愛いピンク色になってきたね？」

「ああ、言わないで……。言わないでえ……」

「ダメだよ。」

ちゃんとレジュメが読めるまでいくらでも続けます」

「そ……そんな………」

パーンっ！！！！

「ああっ！ 痛いっ！ 痛いっ！

お願いっ！ お願いですからっ！」

『お願いっ。』

そういうのは、ちゃんと言うことが聞けるようになってからね」

「い……いやだ……止めて……お願いです………」

パーンっ！！！！

「あっ！！」

叩いてすぐの熱くなっている俺のお尻に向日葵さんの細く、冷たい指がなぞってゆく。

こそばゆいような、悲しいような妙な気落ち。

それは、俺のお尻を弄ぶためだけでなく、俺がレジユメを読み上げ始めるための『待ち』のための時間なのだ俺は理解した。

でなければこれだけお尻叩きの上手な向日葵さんが、わざわざ溜めをつくる必要など無いからだ。

「み、三橋 カナのお尻叩き講座あ。

ひ、一つ。お尻叩きを受ける時は、必ずお尻を高く上げることお…」

パーンっ！！！！

「あああああっ！ いぐうっ！」

パーンっ！！！！

「あああっ！ ひっ！ いいい」

「ほらほら。読んで読んで」

「あぐううう………」

痛みで言葉が出ない。

手のひらでこれだけ強く叩けるのは、すごく珍しい。

というよりも今まで出会ったことのない高いレベルのお尻叩きだ。

パーンっ！！！！

「あぎいっ！！！！」

ひ、ひとつう…お尻叩きを受ける際は、反省しなければならない…ことを…意識してえ…」

パーンっ！！！！

「あっ！ 意識してえ…しっかり反省することお…」

パーンっ！！！！

「あぐうっ！！！！」

衝撃の後の痛みと熱。

熱とともに訪れる胸の奥のモヤモヤとした嬉しい感触。

『反省』とは程遠い感覚。

そう…なぜか『嬉しい』と俺は感じたのだ。

理由は分からない。
でも。

彼女のお尻叩きはとても…、嬉しかった。

「は〜い。

すっかり叩けましたか〜。

適当な所で男子を交代させてくださいね〜」

課長の無情な呼びかけに、向日葵さんにはにっこりと微笑んでから俺を膝から下ろした。

そして、「じゃあ、またね」と言ってくれた。

俺は…お尻にクリームを塗ってから壁際に立つ。

壁際にはまだパートナーを決められない女子と課長に手を引かれおち〇ちんを隠せないようにされている男子たち。

俺はその列に加わって、今までにない心の震えを感じていた。

☆同人サークル： spankingLOVE

☆メールアドレス： muran98@gmail.com

☆HP： <http://spankinglove.x.fc2.com/top.html>